

短波放送を用いたヒアリング訓練 (I)

Radio Japan 等を利用したヒアリング訓練法, およびその意義

林 正 雄*

Hearing Lessons, Using Shortwave Broadcast (I)

The Significance and the Training Method of the Hearing Lesson,
Using Radio Japan, etc.

Masao HAYASHI

(Received October 15, 1987)

According to the increasing interrelations between Japan and the other countries, it has become urgent necessity for the promising youth to acquire the ability to use English as a communication means. Even in this Educational Faculty, most students expect to have language training for communication as well as lectures of the English literature or the English language. The present writer has introduced into classes the hearing lessons using English programs by shortwave broadcasting, such as Voice of America, or Radio Japan, etc.

Through broadcasting, we can get large amount of various information in a short period of time. Students are compelled to concentrate their energies to listening to the English programs. As teaching material, English news has a merit to attract the student's attention easily, because it is closely connected with their general concerns. This paper states the significance of the training method of this hearing lesson and the way how to introduce it to the university students.

はじめに

＜大学における英語学習の目的＞に関する調査の報告書は、いずれの場合をとっても、教員と学生との間のズレを指摘している。学生は＜コミュニケーションの手段＞として、教員は＜高い教養を培うため＞として、英語学習を位置付けようとしている。

英語学習の持つこれら二つの重要な目的を、二つとも達成できれば言うことはないのであるが、＜手段としての英語＞の技能訓練は、会話学校に任しておけばよい、とする考え方が、大学教員の間に、根強く存在するように思われる。結果的に、＜コミュ

ニケーションの手段＞としての英語運用能力を訓練する機会が、失われてしまうのである。専門課程も含めて、特に教養部での一般英語に於いては、英語運用能力の習得を目的とした授業構成を、心掛けるべきであろう。

その一つの試みとして筆者は、数年来短波放送の英語ニュース、及びその他の英語番組から取材した音声英語を、教室に積極的に導入してきた。放送英語は短時間内に、多種多様な情報を流すので、学生の集中力を刺激して、授業が活性化する。生活から遊離した抽象的な論考ではなく、実際に起きた出来事に関するニュースであるため、迫力があり、多くの学生の興味を引くことができる。政治・経済・社会・文化等の、網羅的情報は、学生の社会的関心を

* 外国語科

拡げ、一般教養を高めるばかりではなく、教員の知的
好奇心をも満足させ、授業に臨む意欲を高める、
等のメリットがあるからである。

ニュース・ソース

ニュース・ソースは受信状態が比較的安定している、Voice of America, Radio Japan などを用いた。これ等には、それぞれに異なったメリットがある。

VOA には、News in Special English など、外国人向けにゆっくり発音される番組もあり、極めて利用価値が高い。扱われる情報は、グローバルで世界的視野が広がる。アメリカ国内の、各分野の最新情報が入手できるので、ヒアリング能力が持つ威力を印象付け、訓練の強い動機付けとすることができる。インタビュー番組などから、native 同志の自然な会話を、豊富に取材できる。

Radio Japan の英語も平易なものが多く、発音も明瞭で利用し易い。国内事情をトピックとすることが多く、学生は、既知の情報を英語ではどのように表現するのか、という角度から関心を持つことができる。外国向けの日本紹介番組 (Japan Scene 等) によって、欧米文化志向の強い学生に対しても、日本文化の再認識を迫ることができる。

準 備

まず使用当日の英語放送を録音する。1日～2日遅れのニュースでも間に合うが、ニュースの速報性があるおもしろさを考慮すれば、当日のものが望ましい。Radio Japan の英語放送は、General Service (一般向け放送) ならば、午前10時からほぼ1時間おきになされている。受信周波数は、季節や地域によって多少の異同があるが、15.280Mhz, 17.810Mhz, 17.845Mhz, 等に合わせる。VOA は、15.290Mhz, 17.820Mhz, 等に合わせる。

編 集

録音が済んだ後、教員は学生が興味を示すであろうニュース、是非覚えさせたい表現・効果的な言い回しを含んで入る文章、等を選び出していく。

相当なヒアリング力を持つ学生を相手にするときには別にして、一般の学生にとって、英語ニュースは馴染みが薄い。始めのうちは、簡潔に要約された

headlines だけでも、時間をかけて、丹念に説明していく必要があるだろう。英語ニュースは難しいという固定観念を植え付けぬよう、導入時期に用いる材料は、出来るかぎり平易なものを選ぶべきである。学生の間に、英語ニュースは楽しく、且つ社会的関心を拡げるものだ、とする通念が生まれ、授業の開始を心待ちにするようになれば申し分ない。

運 用

教室での運用は、学生の能力程度に応じて、異なった方法をとらねばならない。ここでは三段階に分けた運用法を提示する。

1. 初級コース

これまで文学を中心に、それも主に訳読作業で英語力を養ってきた一般学生を対象にする場合には、導入方法に注意しなければならない。

時事英語に対する興味付けが大切であり、英字新聞、雑誌、英語放送、等から取材した分かり易くて楽しい話題を、始めのうちはゆっくり、数回読み返しながら書き取らせる。相当に難解な英文を読解できても、聴解力が著しく劣っている学生が少なくないので、文字と音声との間の関連がスムーズにいくように指導する。

ニュースの意味を解説したあとで、文章を暗誦させる。その後、教員の音読またはテープの音声を、繰り返し聞き取らせる。短い文章から入り、次第に量を増やしていく。

2. 中級コース

時事英語の語彙力、およびヒアリング力を、相当程度習得した学生を対象にする。

ニュースだけでなく、Current Affairs, Japan Scene 等を利用した、ある纏まりを持つトピックを一度だけ聞かせ、その内容を答えさせる。英語で要約させてもよい。

学生が満足に答えられないときには教員が先に英文要約すれば答え易くなる。これは内容の濃い情報を英語で表現する良い機会であり、教員にとってもメリットは大きい。教員から学生への、一方的な流れによる授業構成ではなく、教員も授業を進めながら、学生と共に学ぶという姿勢で臨むべきである。

ヒアリングの訓練は、一度完全に意味を把握した英文の音声を、繰り返し聞き取る方法が効果的である。学生にカセット・テープを用意させ、LL装置などを利用して、英語ニュースを一斉に録音させる。意欲のある学生は、小型のカセット・テレコ等

を利用して、好きなときにいつでもヒアリング練習ができる。この逆に、あらかじめテープに録音させておき、家で書き取ってきたものを教室で確認する方法もある。

3. 上級コース

このコースはテープを一度聞き取って、ほぼ正確に内容把握ができる学生を対象にする。出来るかぎり多様なトピックに触れさせるために、英語ニュースなどを聞かせながら、セクション毎に区切って、要旨を英語（または日本語）で述べさせる。英文要約の練習は、＜話す能力＞をつけるための良い訓練になる。教員が、英字新聞や英語ニュースを参考にしながら、ある情報を日本語で述べ、それを学生に英語で表現させてもよい。

ヒアリングをさせながら、学生自身が気に入った表現、使えるようにしたいと思った言い回し、等をノートに書き留めさせる。その後その表現を使った文章をノートに書かせるか、または口頭で発表させる。できるだけ、視覚に頼らないコミュニケーションの訓練を心掛ける。他方、英字新聞、Time等を積極的に読ませる。＜英語は理解するものだ＞という考え方から、＜英語は使いこなすべき手段だ＞という考え方へ、意識の変革を図る。

この段階では、単にヒアリング力の練習に止まらず、音声を介としたコミュニケーション力の習得、更に進んで四技能の調和の取れた開発を目指すことになる。自己の能力が開発されてゆく喜びを実感しながら、意欲的に学習に参加するようになれば申し分ない。

学生の反応

ほとんどの学生はヒアリング練習が不十分であり、始めのうちは戸惑う。二年次から学部へ移行する教育学部の学生について言えば、二年前期の授業が終わる頃までには一様に音声英語への興味を深め、自信を付けてくる。次に紹介するのは、3年前期の終わりに記録された教育学部生の生の声を、箇条書に整理したものである。

1. 積極的評価の理由

- ・ヒアリングの良い練習になる
- ・生活に密着した語彙を増やすことができる
- ・新出語彙が、まず耳から入り、その後意味がスベリングを考えるので覚え安い
- ・社会問題に関心を持つために役立つ
- ・話題が現在起きていることだけに興味をそそる

- ・普段耳にしない専門用語を覚えることができる
- ・新聞に眼を通すよりも楽しくニュースを知ることができる
- ・教師になるのであればある程度（英語を）聞いたり喋ったりすることが必要だ
- ・国際化が叫ばれる今、時事英語を聞き取る力が必要である
- ・ニュース英語などは自分ではまず聞かないので教室で続けて頂きたい
- ・何回も聞きながら聞き取ることは、始めは分からない話が後ではきちんとした文になるので、しっかり聞けば出来るという気持ちになり、これから家でもやってみようという意欲が湧く

2. 消極的評価の理由

- ・専門用語や難しい単語が聞き取れない
- ・骨が折れる
- ・しょっちゅう聞くのは難しいのでうんざりする
- ・先生に当てられるとおどおどしてしまう
- ・慣れないことなので疲労が激しい
- ・ニュースのスピードが速すぎるので繰り返し聞かせてもらいたい

3. 今後への展望

- ・政治などの内容よりも、皆が興味あるもの、（例えばスポーツ、映画、ドラマなど）の英語が聞きたい
- ・毎日の訓練が大切だと思うので、（授業のときだけでなく）家でもテープを聞きたい
- ・単語としては入ってくるのに、全文の意味となると頭に入らない。Dictationは続けてしかも割と一度に長い時間やらないと耳が慣れないとおもう
- ・もし聞き取れるならば、生きた言葉（実際の会話）として使うことができる
- ・英語を読むことを中心に高校までやってきたので、これから話す、聞くを中心に生活に役立つ英語をやっていきたい
- ・時々家でもテレビの二か国語放送でニュースや映画などを聞いてみたりするようになり、母に時折訳してあげたりして通訳のおもしろさが分かって来た

む す び

学生の要望に耳を傾ければ、「ただ紙の上の勉強ではなく、実際に使える英語、生きた英語」に対する熱い期待に圧倒される思いがする。国際化の流れ

は益々盛んになる一方である。そのことを、肌で感じ取っているのは、あたらしい時代を開拓しなければならない学生達かもしれない。

英文学にも造詣の深い、教養豊かな人材の育成は、英語教師の最終的な使命である。しかしそれ以前に彼らは、必要条件として＜英語によるコミュニケーション＞が出来なくてはならない。英語が読めれば話すほうは何とでもなる、と言う思い込みで実用英語の訓練をなおざりにしていられる時代ではない。高度の読解力を持つ学生でもヒアリング力は著しく劣っている者が少なくない。より早い段階での、英語音声に対する聴覚訓練の必要性が痛感され

る。聴解力は、ある程度、聞き取る音声の量に比例して向上するので、教員の間で連携した授業が必要となる。

短波放送や、二カ国語放送によるニュースや洋画、それに加えて衛星放送も開始された今日、(音声)英語を日常生活のなかに組み込むことが出来るようになった。新聞、ラジオ、テレビなどの日常的メディアを通して流される英語を楽しみながら、自然なかたちで英語を身に付ける事は、それ程難しいことではない。本稿では、そうした生活に組み込まれた英語訓練を目的とした、ヒアリング練習の一方法を試みた。